

## 左京・コバノミツバツツジ群生地が絶滅危機

## 里山のシカ食害防げ

散策道の途中に設けられた扉を通してコバノミツバツツジ群生地  
に向かう入山者(京都市左京区)



夏の五山送り火で「法」の字をともし京都市左京区の山の尾根に広がるコバノミツバツツジ群生地が、シカによる食害で絶滅の危機にひんしている。これ以上の被害を防ごうと、市民団体「京都宝の森をつくる会」などが一帯を柵で囲う取り組みを進めている。

## 市民団体 270人にわたり柵設置

宝が池公園「野鳥の森」から徒歩10分ほどの山中にあるコバノミツバツツジは、毎年3月下旬から4月上旬にかけて淡い紫色の花を咲かせる。満開の時期には散策道を覆うトンネル状になる光景が人気だが、近年は、一帯に増えてきたシカが枝を折って花や芽を食べたり、幹を傷つけたりする影響で花が減り、花のトンネルの存続が危ぶまれるようになってきた。

これを受け、山肌を覆う下層植生も守ろうと、市民や研究者、学生が協力してコバノミツバツツジの散策道を含む約3600平方メートルを防鹿柵で囲う「作戦」を計画。70万円近い寄付金も集まったことから、今月2〜4日にかけて延べ約80人が参加し、高さ2メートルの柵を全長270メートルにわたって張り巡らせた。

シカの侵入を防ぎつつ、山の散策も楽しめるよう、防鹿柵と散策道が交差する2カ所には開閉式の扉を設けた。入り口には、プロジェクトへの理解を呼びかける内容の張り紙もした。京都宝の森をつくる会代表の高谷淳さん(51)は「散策道に扉をつけないければ植物を守れない状況になっていることを多くの人に知ってほしい。今回の取り組みが、都市近郊にある里山のあり方を考えるきっかけになれば」と話している。

(太田敦子)